創作キャラ短編集

封弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創作キャラ短編集

【Ｎコード】

Ｎ９８４４Ｄ

【作者名】

封弥

【あらすじ】

こちらは創作キャラ短編集です。ノーマルカップルです。ＢＬやＧＬは取り扱いません。たとえば、「草魏×水伊」と言うのが出てきてもＧＬでは無いと言うことです。では、其れをふまえた上でお読み下さい。

昔と変わらぬ少年。（楼々×柳耀）

私は一人、草魏娘子の邸の庭で木刀を振っていた。
草魏娘子達に心を許してからかれこれ半月がたった。
娘子の方も、最初の内凄く冷たい性格だと想ったのに逆転。
凄く優しく接してくれ、私として安心するほどだった。
（…そう言えば、娘子は何処に）

ふと思って木刀をおろして辺りを見渡す。
入り口と真反対の方向を向いたとき、後ろの方でかさっと音が鳴る。
振り向いて見つけたのは、娘子ではなく…

「え……！？ちょ！柳耀！？」
「久しぶりだね、楼々。そこら辺の人に楼々を見かけたか聞いたら、一発で解った。ここら辺では楼々有名らしいぞ」
「私がどうやって有名になったんだ？」
「…恐らく草魏娘子だよ。この邸、長安内の邸の五本指には入っているぐらいに有名なんだから。俺の所なんて五本指の話じゃない。百本は無いと入ってこないよ」
「つまりは人気がないって事でしょ」
「其処を言うなよ」
「それよりどうしたの？こんな時間に」
あぁそうだったと柳耀は深呼吸をする。
大した用じゃないんだけどな、と微苦笑する柳耀。
「いや…その…手合わせして貰っても良いか？」

拍子抜けた。
剣術や刀術を余りやらない柳耀が手合わせを頼むなんて。
其れでも良い。
昔は凄く剣術に填ってたもん、柳耀は。
だからきっと……強いはず。

「良いよ」

短く答えて近くにあった木刀を手渡す。
弱くても知らないよ、と柳耀は苦笑しながら言った。

「私の方が弱いに決まってるじゃない。昔、柳耀強かったんだから」
「今は知らねぇよ。昔は昔、今は今。どうなってるかは分からないよ」
「柳耀も凄いこと言うようになったね。吃驚するよ」
「…楼々って結構最悪だな」
「何とでも言ってなさいよ」

そう言った後、木刀を私の方に向ける柳耀。
今の柳耀が、ふと昔剣術などが大好きだった頃の柳耀と重なる。

（昔と全然変わってないじゃない）

微かに笑った私。
柳耀は気が付かなかったみたいだけれど。

僅かな静寂な後、飛び出したのはほぼ同時。

木同士がぶつかり合って少しの火花が散る。
その火花が消える前にまた、ぶつかる。
柳耀の動きは軽やかで私とは違い素早かった。
（やっぱり…強いんじゃないの）
若干むすっとしつつも、木刀を振り続ける。
私の木刀が柳耀に近づけば、柳耀は其れを弾き返す。
その逆のことだって有った。
木刀を振り続けていたとき。
隙をせてしまった刹那、私の胸当たりに柳耀の木刀が真っ向から入ってきた。
余りにも力が強かったのか、私はそのまま跳ばされ握っていた木刀も一緒に飛んでいってしまった。
「楼々！！！！」
その言葉が聞こえた途端、私の意識は遠のきそのまま目を閉じてしまっていた。
…負けたんだ。
久々に柳耀と対決したのに。
弱くても知らないと言ったあの柳耀に負けた。
悔しくはないんだ。
…凄いと想った。

私は手加減をしたわけでも無い。
なのに柳耀は凄く強かった。
何処で特訓したのかと言うぐらいに強かった。

私も……特訓しなきゃな。

あの頃みたいに。

『楼々！手合わせしよう！』
『え！？今日で五回目だよ？』
『木刀振ってたら、楽しくなってきたんだ！楼々も同じだよ』
『どうして分かるの？』
『楼々が木刀振っているとき、凄く楽しそうな顔してる。俺は其れで分かるんだ』
『柳耀は凄いよ。私の気持ちまで読み取れるなんて。…あ、手合わせだけど特訓してからにするから御免ね！』
『特訓、頑張れよ。楼々』

その時はまだ幼かったし、大抵素振りしか練習しなかった。
今となれば山奥で特訓とか色々してる。

やっぱ柳耀は強い。
昔と全然変わってない。

「――う――ろう―楼々」

霞の向こうから聞こえた声。
紛れもなく…柳耀だ。

ゆっくり目を開けた先には見覚えのある天井。
…娘子の家の天井だ。
娘子の侍女にでも頼んだのだろう。

「りゅ…よう」
「楼々！！」

よかった、とホッとしたように笑う柳耀。
だけどその顔の何処かで凄く辛そうな思いが混じっているような気がした。

「昨期は…御免。当てるつもりは…全然無かったんだ」
「分かってるよ。私だって隙があったから！特訓しなきゃって」
「でも…俺の無意識行動で楼々がこんな事に」
「――そんなに私が心配なの？」
「…心配だよ。幼馴染みだし。……大切な奴だから」
「……え？」
「もしも今回のことで楼々が死んでたら、俺どうすれば良いか分からなくなってた」
「死にはしないよ」
「分かるのか？」
「うん。あの時の柳耀みたいにね」

真似かよ、と微苦笑する柳耀。
だけど真似なんかじゃない。

…柳耀の前で死ぬわけにはいかない。

せめて死ぬなら一人で。
大切な人の前では死ねない。
何があっても絶対に死ねないから。

そう言えば柳耀は小さい頃にも「楼々のこと心配なんだよ」と言っていた。
…今も同じ思いならば、何も変わってない。
それに木刀を向けたときのあの眼差しさえも変わっていなかった。
昔の柳耀と重なるぐらいに。

柳耀は、何も変わってなかったんだ。私が回想した五年前と、五年後である現在とは。

「柳耀は…昔と何も変わってない」
「え？」
「私に木刀を向けたとき、昔の柳耀と今の柳耀が重なったんだ。…其れだけ、必死だったんだよ。今回の柳耀」
「俺が変わって無くても、楼々は変わった」
「私？何が変わったの？」

『可愛くなったし、優しくなった』

その言葉に顔を真っ赤にして、柳耀を殴ってしまったというのは数秒先の話。

五年前の誓い　（草魏×不知火）（前書き）

すっごく、甘いです。甘いのが苦手な方は見ないことをお勧めします。

五年前の誓い　（草魏×不知火）

「うわぁ…」
「綺麗だな、桜」
「うん！」

俺達は今日、芙蓉園に来ている。
理由は俺が偶々暇だったから。それで草魏を誘おうと想ったまでだ。
彼奴は桜が大好きだと言っていたし、今の季節丁度芙蓉園は桜の花見客でいっぱいになっていると思う。

でも理由は其れだけじゃない。
最近、有る真実を知ってから草魏の表情は暗くなっていたから。
せめてその顔を笑顔に戻してあげたかったから。

今の草魏は、今までに無い位のとびっきりの笑顔。

近くにあった桜を枝から手折る。

「一寸！芙蓉園の花を折っちゃ駄目じゃない」
「いや、ちゃんと理由があるから」
「…え？」

俺は、その桜を草魏の髪の所にそっと挿す。
丁度桃色の服を纏っていたのか、更に可愛いと想ったのは言うまでもない。

それ以前に、一つ一つの仕草に俺は心拍数が異常な数になってしまう。

「似合うな、草魏が付けると」
「そ……そうか？私、そんなに可愛い女じゃないと思うけど」
「其れとこれとは違うんだよ」

（とっ取り敢えず……可愛すぎ何だよ、草魏）

若干からだが熱く感じた俺。
…本気で草魏が好きなんだなぁ…。
改めてそう思った瞬間だった。

俺は、惚れ弱みを偶に起こしてしまう。
木刀を交えずとも惚れ弱みの所為で負けてしまうこともしばしば。
…いい加減、告白って奴をしないといけないのかなぁ…。

「不知火？」

大丈夫？と俺の顔をのぞき込む草魏に更に顔の温度が上がる。

（くそっ、反則だぞ草魏！！）

大丈夫だ、と言ってまた歩を進める。
春になれば一段と草魏が可愛く思える。
桜が好き故に可愛さが引き立つのかもしれない。

「な、なぁ草魏」
「ん？どうした？」

「俺がさ、もしも『草魏が好きだ』って言ったらどうする？」
「ど、どうって…？」
「取り敢えずどう答えるかって事」
「……『私も好きだよ』って答えるかもしれないなぁ…。ってまさか不知火私のこと…！！！」
「いや、ちっ違うって！」
「はぁ吃驚させないでよね」

違うわけ無い。

本気でお前のこと、好きなんだぞ？
この世で一番。
例え、草魏より可愛い奴が出てきてもお前しか見ないから。

大胆に言うと、お前を中心に世界が回ってるみたいな。

草魏の身に何かあったら、俺自身が平常心でいられなくなる。

この手で、必ず草魏を守ると決めたから。
…あの五年前の約束で。

『草魏』
『どうした、不知火』
『俺、決めたんだ』
『何を決めたの？』
『必ず、草魏は俺が守る。危険な目に遭わせないって、誓う』
『し、不知火…？』
『ずっと俺、考えてたんだ。…あの事件で、草魏が凄い怪我を負っ

てしまったのは……俺の所為なんだって』
『不知火……』
『だから…絶対、俺が守るって。何があっても必ず、俺が守るって』
『それだったら、私も不知火のこと守る。…此処まで真剣なら、私だって真剣なんだからね！』
……ふっ、と笑った瞬間だった。
何処からか、悲鳴のような声が聞こえてきた。
俺と草魏も同時に振り向く。
（ぞ……賊！！！！）
辺り一面が血の海に変わっていた。
凄い勢いで賊、一人がこちらに向かっている。
（まさか、草魏狙い！？）
「不知火…あれ、私が狙いなのか」
「恐らくな！！！」
そう言ったと同時に、懐に忍ばせておいた剣を抜き、賊の剣を受け止める。
「ふん、邪魔が入ったか」
「草魏狙いなんだな！？」
「そうだ。私が狙っているのは草魏娘子のみ。後は要らぬ」
「草魏には指一本触れさせない！！！例え、俺が草魏より剣術が下でも必ず守ると誓った！だから絶対に草魏には指一本触れさせない！！！」

「誓いだかなんだか知らないが、今のお前の力じゃ私を倒すことは出来ない」

そう言われた瞬間、俺の腹当たりに痛みを覚えた。
賊のもう片手にあった短剣で腹に一発食らわされてしまった。

「不知火ーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

草魏が思いっきり叫んだ後、倒れた俺に向かって賊は一言言った。

「だから言ったのに。今のお前の力じゃ私を倒すことは出来ないって」

「良くも…良くも不知火を！！！！許さない！」

霞の向こうで、草魏と賊が剣を交えていた。
草魏の表情が明らかに怒りに満ちていた。

馬鹿だな……俺。
自分で守るとか言っておきながら、弱すぎじゃねぇか。
やっぱり、草魏には勝てないんだな。

剣も、何もかも…。

そう思ったと同時に俺は、意識を失ってしまった。

＊＊＊

何で！！！何で不知火をこんな目に！！！

「アンタは何で私を殺りに来た！！」

「邪魔だと総帥が言っておられた。…だからだ」
「だから何だ！私はそう簡単に死にはしない！少なくとも不知火の前では……絶対に…死なないんだから！！！！」
そう言ったと同時に、賊の腕を斬りつけ次は横っ腹を斬る。
賊はぐらっと揺らめいたが直ぐに立った。
だけど、口から出た台詞は意外な物だった。
「ちっ……覚えてろ」
賊はそう言って、そそくさと去っていった。
後ろ姿が消えた途端、不知火の方に駆け寄る。
「不知火！！不知火！！！ねぇ、起きてよ！不知火！！！」
気が付かないうちに涙を流していた。
息はあるから、まだ生きている。
起きてよ…と二三度言ったとき、うっすらと緑の瞳を開けた不知火。
「くさ……ぎ？……お前、何泣いてるんだよ」
「だって……心配だから」
「…心配してくれて、有難うな草魏。…それと、御免」
「え？」
「五年前、約束したのに『必ず、草魏は俺が守る。危険な目に遭わせないって、誓う』って。なのに、こんな様になるなんて」
「そんなのどうだって良い！不知火が傷ついたの……私の所為だ」
「お前の所為なんかじゃないから……俺が、弱かったから。心も剣術も何もかも」
不知火は、そう言って力なく笑った。

まだ草魏には何も敵わないよ、と更に言った。

「だけど、そのお陰でお前無傷で済んだんだろ？」
「そんな…こんな形で守られても、嬉しくも何ともないよ」
「だよな……。俺、また特訓しないとお前を守ってやれない」
「……守らなくても、良いよ」
「え？」
「私が守ってあげれば良いじゃないの。もう……不知火が傷つくの、見たくないんだよ」

私はそう言って、また新しい涙を作った。

「ったく、泣きすぎ」
「五月蝿い」

不知火はいつの間にか起きあがっていた。
傷、痛くないの？と問うてしまう。

「痛くねぇよ、これ位。……本当に有難う、草魏。お前に守られっぱなしだな、俺」
「馬鹿言うな。私の方こそ守られっぱなしなのに」
「今の今までこうして生きてられたのお前のお陰だよ。…本当に、心の底から感謝してる」
「やだな、私そんなに感謝されるようなことして……！！！！？」

ふと視界が暗くなる。
……唇が重ねられて、言葉自体が言えない。

唇が離れた後、私は一瞬固まって物が言えなかった。

「ちょ……不知火！？」
「御免。…今まで言えなかったけれど……好き、なんだ」
「そんなっ、どうして…」
「知ってる？俺、あんな約束お前のこと想ってないときっとしてなかったはず…そのころから既にお前のこと、好きだったんだぜ？」
「……どうして」
「え？」
「どうして、早く言ってくれなかったのよ！！！」
「え…いや、ちょ…」

同じなのに。気持ち、全て同じなんだよ私も。

不知火と、全く。

「…え？」
「ずっと想ってた。…どうして、こんなに不知火って格好いいんだろうって」

闘う姿も、何もかもが格好良くて惚れていた私が居た。
（こんなにべらべら喋る私って何か変じゃない？）

「馬鹿みたいな話だけどさ、本当のことなんだ」
「……有難う、草魏」
「へ？」
「ホント、お前みたいな奴好きになって良かったよ。…とっ、取り敢えず何とか治療してくれね？腹思いっきり刺されて痛ぇんだ」
「はいはい。…歩ける？」
「何とかかな。…治らねぇと、お前の稽古受けられない」
「やだなぁ絶対受けろとは一言も言ってないのに」
「駄目だ。治らないとお前を守ってやれない」

「まだ言うか。私は大丈夫だって言ってるでしょ？心配すんなって」
「するから言ってるんでしょうが！！！」
そんな言葉を交わしながら私達は邸に向かって戻っていった。

後日――。

「…もうっ！！本当に恥ずかしい思いした！！」
「あーだから御免って言ってるだろ！？彼はわざとじゃないって！！」
「分かってるよ！わざとじゃないの分かってるよ！緊張って言うか……接吻とか未経験だから！！！」
「俺の思いが詰まった奴で緊張だとぉ！？巫山戯るんじゃない！」
「巫山戯てなんか無い！！今、言ってることは全て本当なんだから！！！って言うか、俺の思いが詰まったって言うのが凄く余計！！！」
「はぁ……取り敢えず、御免」
「う、うん」

いきなり謝られて一寸拍子抜けた私。
…だけど、正直嬉しかった。
想いをこうして伝えられたから。

さぁ稽古やるぞ、と私は朝日に向かってそう叫んだ。

五年前の誓い　（草魏×不知火）（後書き）

あとがき

はっずかしいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！（↑
滅茶苦茶恥ずかしかったです＞／／／＜　これ描いてるとき。
何画詐欺と不知火って甘いのしか思い付かなかったんですよ。といっても、今は一寸別のを作成中ですけど。
取り敢えず…恥ずかしすぎて我ながら変なことをしたと反省中（苦笑）
ではでは。

年の差なんてどうでも良い　（水伊×要）（前書き）

多少甘めです。

年の差なんてどうでも良い　（水伊×要）

東市で買い物をしていた私。
母上が最近体を良く崩すため、看病を続けている。
…と、其処で背の高い紫髪の人を見つけた。
恐らく彼は…

「要殿ーっ！」
「あ？よ、水伊じゃねぇか」
「要殿はどうなさったのですか？東市で」
「いや、一寸ぶらついてたんだ。…お前は？」
「母上が体を崩してしまったので…取り敢えず夕飯の材料を買いに来たんです」
「なんなら、俺も手伝おうか？こんなに荷物有るし」
「いえいえ、要殿に迷惑をおかけしてしまいます。私一人で大丈夫ですよ」
「なら……良いけど。そうだ。お前にこれ、あげるよ」
「え？」

そう言って渡されたのは、腕輪。
随分前に要殿と東位置に来たとき、私が綺麗だっていってた腕輪。
まさか、これを買ってくださるために東市に…？

「要殿。もしかして、これを買ってくださるために東位置に来ていらしたのですか？」
「え…いや、そう言うワケじゃ…」
「そうにしか思えないんですけどね…」

――素直に言ってくださって構わないのですよ？要殿
――いや……でも……っ。確かに、今日買いに来たんだ。お前が凄く欲しそうだったから
――高いのに、良かったんですか？買って貰っちゃって…
――良いんだ。お前のためだし
――本当に有り難うございます！大切にしますね！じゃあ、今日はこの辺で失礼します。
――またな、水伊

そう言って、要殿と別れた私。
腕に填められた腕輪を見て、少し笑った私。
五歳も年上の要殿に初めてあった頃に一目惚れした私。

だけど…年の差なんて関係ないのかもしれない。

その時、余所見をしていたのか誰かにぶつかってしまう。
その反動でこけたとき、足を思いっきり捻ってしまい座り込む体制になってしまう。

「ごっ御免なさい！」
「御免なさいで済むと想ったか？お嬢ちゃんよ」
「…他に何か挨拶でもしろと？」
「余所見をしていた奴が悪いんだよ」
「其れは既に承知しております。取り敢えずその場所を退いていただけないでしょうか。母上の看病に戻らなければならないのです」
「あ〝ぁ？戻すとでも想ったか？」

――マズイ。
賊用の剣は置いてきたし、愛剣も持ってない。
それに、足を捻った所為で動けない。

無防備状態だ。
気が付けば私の周りは、五・六人の破落戸（ごろつき）に囲まれていた。
「はぁ…私を囲んで何のおつもりですか」
「当たり前だろ？アンタを片付けるんだよ。丁度剣も持ってないみたいだしなぁ…」
どうしよう…為す術もないよ……。
――助けて、要殿っ！！！

「おい。水伊に寄って集るんじゃねぇよ」
「貴様何者だ！」
「俺？旺要。取り敢えず其処にいる水伊の幼馴染み。…水伊に指一本触れんじゃねぇ。もし、一本でも触れてみろ。俺がぶった切ってやるさ」
そう言って要殿は懐から剣を取りだして、五六人の破落戸を相手にしようとしていた。
「勝てるんですか！？要殿！！」
「余裕余裕。お前は其処でじっとしてろ。助けてやるから」
もう、その言葉に従うしかなかった。
何も持ってないから。

要殿は、六人の破落戸が一斉に飛びかかってきても優々と交わし、弾き返す。
その姿に暫く惚れていたのは言うまでもないけれど。
本当に…尊敬しています、要殿。

いつの間にか、昨期私を襲おうとしていた破落戸は床に突っ伏していた。
片付けるまでに数分もかかっていないと想う。
要殿は…本当に凄い…。

片付け終わった後、要殿は剣を鞘に収め私の方へと歩んでくる。

「大丈夫だ。もう、片付けたから」
「有り難うございます。…生憎剣を持って無くて…」
「いや、良いんだ。…なんか、お前に呼ばれた気がするんだよ。助けて、ってな。んで、此処に来たらそうなってた訳だ。悪かったな、一人にさせて」
「良いんです。…無防備だった私もいけませんし。あ、戻らないと……痛っ」

足の方に痛みを感じて、裾を捲ってみたら昨期転けたときに捻った足が赤く腫れ上がっていた。

「どうしよう…このままじゃ帰れないな…」
「何なら俺が馬、持ってこようか？」
「え？そっそんな要殿が手間掛かるだけですよ！」
「取り敢えず待ってろ。急いでいくから」

そう言って、私が止めるのも聞かずに要殿は急ぎ足で戻っていった。

本当に…迷惑かけすぎだな…私。

だけど、要殿と少しでも長く入れるのなら其れは其れで良いな、と思った私。

数刻して要殿が馬に乗って私の前に来た。

「待たせたな、水伊。取り敢えず、馬に乗れるか？」
「何とかいけると…痛っ」
「やっぱ、無理か。……一寸悪いけど」
「え？何するつもりですか……ってえぇ！？」

世に言う「抱き上げ」って奴をされている私。
馬上に来たときにはもう心拍数が異常な数を示していた。

「しっかり捕まってろよ。手、離すな」
「わかりました」

そう言って手綱を持つ。何時もの馬の早さとは何か違うと想った私。

（急いでくれている？）

「もしかして、急いでくれてるんですか？要殿」
「当たり前だ。お前をこのままにしておく訳にはいかないからな」
「本当に……迷惑ばかりかけて申し訳ございません」
「馬鹿言うな。俺は迷惑なんて思ってないから。…むしろ、かけてくれて良いから」
「そんな訳にはいきません。…貴方に今までどれほど迷惑をかけた

か。もう、数えきれません」
「其れだったら俺だって同じさ。本当に、済まない」
「要殿が謝る必要なんて、何処にもないです。…今回も本当に有り難うございます」
「良いんだ。お前が何かあったら、俺が平常心ではいられなくなるからな」
「あまりに執着する人ならその場でぶった切ってますけど、要殿場合ぶった切れ無いです」
「何だ世其れ！？其れってもし、俺が幼馴染みとかじゃなかったらぶった切られるって事！？」
「そうですね」

そんな事を言って笑いながら、馬は私の家の方へと向かっていった。

年の差の恋……どうでも、良いよね。
好きなのは、好きなんだから。
これからもよろしくお願いします、要殿。

…私は何時か賊として貴方を殺しに来る羽目になります。
その時は、本当に御免なさい。
一つの任務として、受け入れてください。

そして、何時までもこの年の離れた恋を見守っていてください。

年の差なんてどうでも良い　（水伊×要）（後書き）

あとがき

えーーーーーーーーーーーっと（長い

とっ取り敢えず、甘めです。

封弥さんは甘いのしか書けないんですよ（↑

甘いのを得意分野としています（黙れ

取り敢えず、次回は甘くはないと想うんです。

あくまで予想ですので、お気になさらないでください。

封弥の予想は６８％当たらないので（微妙だな

ではでは♪

死に顔なんて見せない。　（楼々×柳耀）　（前書き）

甘めです。

死に顔なんて見せない。　（楼々×柳耀）

ある時、俺はふと東市の所で雑貨店を見つける。
今日は楼々の誕生日だっけ…。

「あれ？柳耀？どうしたの、こんな所で一人突っ立って」
「えっ！？ちょ、楼々！？何時から其処に！？」
「今に決まってるでしょ。偶々雑貨店の前を通りかかったら柳耀が何かしてるから声をかけただけよ？」
「いや……別に何でもないんだ」
「？そう…。なら、良いけど…。あ、そうだ。今日私が誕生日だから、邸で生誕夜宴やるつもりなんだけど…娘子とか呼んでくれない？多分娘子の所で全員いるはずだから。」
「……わかった」

楼々に頼まれたら行くしかない。
楼々には、逆らえないからな…俺は。

雑貨店にはまた後で寄っていくことにし、一旦東市を後にした。

崇仁坊外れの栄邸。
扉を軽く叩くと、顔見知りの侍女が出てきた。

「おや、柳耀様。娘子様にご用事でしょうか？」
「はい。楼々に頼まれ来ました」
「どうぞお入り下さいませ。後、娘子様以外にも要様・水伊様・不知火様がいらっしゃいますがよろしいでしょうか」
「大丈夫です」

その話の後、娘子の邸に足を踏み入れる。
やっぱりいつ見ても広いな、と思ってしまう俺だった。
正直言うと、楼々の家屋敷よりも広いと思う。

暫く歩いて庭まで来ると、娘子の他、要・水伊・不知火がいた。

「あら？柳耀殿ではありませんか」
「ん？柳耀か。私に用があると聞いたが」
「あぁ…今日の事なんだけど寅の刻に楼々の家に来てくれだって。…楼々の生誕宴をやるんだ」
「なるほど。其れでお前は俺達に伝えに来たわけか」
「…そんな感じ。あと少しだから、急いでおいた方が良いよ」
「そうですね。わざわざ有り難うございます、柳耀殿。草魏殿、急ぎましょう」
「そうだな。柳耀は先に行っておいてくれるかな？私達も後で行くからさ」

わかったよ、と言い俺は東市に向けて急いだ。
時間がない。急がなければ。

雑貨店を前にして、何を買おうか迷ってしまう。

…そう、いえば…。

『楼々、そろそろ帰るよ？…楼々？』
『この腕輪、すっごく綺麗だなって思ったんだ。藍色の勾玉なんてホント綺麗…。何時か、母上にでも買って貰おう』

その会話をふと思い出し、その腕輪を探した。

…有った。
藍色の勾玉が紐に通されている腕輪。
楼々がずっと欲しいって言ってたやつだ。
これならきっと、喜んでくれるはずだ。

其れを買った後、更に俺は急ぐ。
宴まで時間がない。
数分しか、残り時間がない。

道政坊、憂邸。
肩で息をしながら重い扉を押す。
そして直ぐさま宴のある場所へと急ぐ。

今夜は夜宴だし、全員泊まり。
其れは最初から決まっていたことだった。

宴のある部屋の襖をゆっくりと開けると楼々が振り向いた。
…まだ、草魏お嬢達が来ていない。
贈り物でも用意しているのだろうな、俺みたいに。

「いらっしゃい、柳耀」
「誕生日おめでとう、楼々」
「柳耀に言って貰えて、一番嬉しいな」
「…え？」
「だって、何年も共に過ごしてきたんだもの。柳耀は小さい頃に両親を亡くしてしまって、私達の所で此処まで育てた。其れまで何年有ったと想ってるのよ」
「そうだね…。ホント、長い間過ごしてきたんだよな楼々と。……あ、これ」

懐から腕輪を出し、楼々の腕にはめる。
楼々は、凄く驚いたような顔をして俺の顔を見た。

「これ…柳耀、覚えてたの？」
「あの時、凄く欲しそうにしてたから。それに、藍色って凄く楼々に合うから。こんなものしか渡せなくて…御免」
「ううん。すっごく嬉しいよ！ありがとう！柳耀！」

その笑った顔を見て、俺もつられて笑顔になる。
（うわー堪らなく可愛いってこれ）

その数分後には草魏娘子その他三名も揃い、宴が行われた。
草魏お嬢達もやっぱり贈り物を用意していたらしく、楼々に渡していた。
楼々はその度に笑顔を作り、有難うと礼を述べていた。

楽しい時間がずっと続いていた。

…と思っていたのに。

「ねぇ柳耀。何か、暑くない？」
「そう言えば…。昨期から俺達の後ろ辺り凄く暑いな…。なぁ、草魏娘子」
「どうした、柳耀」
「草魏娘子の後ろ、暑いか？」
「後ろ？ううん、暑くないけど？」
「そうか…なら」

良いんだけど、と言おうとしたときに暑い理由が分かった。

突如爆発のようなことが起き、辺りは大混乱に陥る。
楼々の手を引き急いで逃げようとしていた。
…次の瞬間。
爆発のようなこと、所の話じゃない。
本当の大爆発が起きて、俺と楼々を唯一繋いでいた腕が解かれてしまう。
そして楼々は火の中へ、俺は部屋の外へと放り出される。
「柳耀ーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」
叫び以上の声が火の中から聞こえ、体を起きあがらせ急いで火の中へ飛び込む。
火の中、暑くて仕様がなかったけれどそんな事を言っている暇なんて無い。
楼々を…助けないと。
「楼々！！！いたら返事しろ！！！」
「……柳耀ー！！！！！！」
振り向いた先には一番火の勢いが強いと思われる場所。
「楼々！！！！！」
急いでその場所へ走り楼々の手を握る。
…だけど。
四方八方火の海。
逃げ場が、無い。

「どうしたら…良いの。もう、逃げられないの？」
「そんな事無い。絶対に、助けるから。死んでも助ける」
自然と言葉が出ていた。
こんな言葉、絶対に喋らないのにな俺。

……手段。
火の中の強行突破。
其れしか浮かばなかった。

「…楼々。強行突破するけど良い？」
「火の中に…行くの？」
「其れしか方法はないんだ。…さもなくば、死ぬんだよ」
「わかった。だけどお願い。無茶はしないで。この場で死なれたら…私、どうしたら」
「大丈夫。楼々の前では絶対に死なないよ。……――それに」
楼々の腰と足に腕を回して、抱き上げ走る。
数秒走り、飛び込む瞬間に一言言った。

『大切な奴の前で死に顔見せるほど、俺弱くないから』
楼々の表情はよく見えなかった。
俺自身も火に飛び込む瞬間、目を瞑ったから。
邸の外に飛び出し、砂埃を見せて俺達は脱出を成功させる。
「柳…耀…？」

「大丈夫。もう、抜けたから」
「……ねぇ」
「ん？」
「火に飛び込む瞬間、なんて言った？」
「……大切な奴の前で死に顔見せるほど、俺弱くないから」
「そう、言ったの？」
「そうだよ」
「……馬鹿ね」

え？と俺は思わず素っ頓狂な声を上げる。
そして、馬鹿と言われたことに少しむかっと来て…

「なっ何が馬鹿なんだよっ」

と思わず荒く言葉を吐いてしまう。
だけど楼々は、そんな俺に構わず

「……柳耀が強いなんて、昔っから知ってるわよ。ばーかっ」

顔を赤くしながら楼々は俺に向かってそう吐き捨てた。
（くそっ、可愛い！！！）
そう思った後に思わず楼々を腕の中に閉じこめてしまったという俺の行動は間違っていたのだろうか。

消えない思い出　（楼々×漣葉）（前書き）

漣葉の姉も出てきます。

消えない思い出　（楼々×漣葉）

東市。
少し背の低い子供が、髪飾り屋を目の前に悩んでいた。

名は漣葉（れんよう）。
つい最近、この町にやってきた謎多き子。
実は性別不明なのだ。
本人は「男」と主張するが、外見からすれば男とも女とも見える。
そのため性別は不明とされている。
一人称は俺で、二人称はアンタや名前。それに「姉」や「兄」をつける。

最近来たばかりの漣葉が一番初めに会ったのが、道政坊（どうせいぼう）の一邸・憂邸に住む憂楼々。
彼女は、破落戸（ごろつき）に絡まれていた漣葉を救った女。

漣葉は楼々を実の姉のように慕っている。
姉のように慕っている理由は、唯一つ。
前にいた漣葉の姉が楼々と似ていたから。
楼々は其れを聞いて、ちゃんと納得し優しく接している。

そんな楼々への恩返しのため、何か買う物はないかと東市へ来ているのが今の漣葉。
そして、髪飾り屋で楼々に丁度に合うような物はないかと必死になって探している。

「ねぇおじさん。黒い髪をした女の子に似合う髪飾りとか有る？」

「ふむ…黒髪の子、とな。…なら…此は、どうじゃろうか」
そう言って老人、否この店の店長が小さい菖蒲の花が何個も付いている簪を手に取り漣葉に渡す。
漣葉は其れをまじまじと見つめ、想像した。
この髪飾りを楼々が付ければ…と。
漣葉の口元はたちまち曲がり、最終的には笑顔になった。
「じゃあ、これ頂戴。おじさん」

東市を出た辺りからだんだんと足取りが軽くなっていく漣葉。
其れだけ楼々の家に行くのが楽しみなのだろう。
暫くして、漣葉は楼々の家を前にして幾度か深呼吸を行う。

「失礼します」
「あら、漣葉様ではございませんか。…娘子様にご用でしょうか」
「はい。楼々姉に渡したい物が」
「直接お渡しになるご予定で？」
「はい」
「畏まりました。どうぞ、お入り下さいませ。お嬢様も呼んできます」
そう言って開かれた扉をすっと通り抜ける漣葉。
そして、縁側に座って楼々が来るのを待っていた。
「漣葉！！」

「あ、楼々姉！」

目に星を入れた状態で、楼々を見つめる漣葉。
楼々はその様子に苦笑しながら、漣葉の隣に腰掛ける。

「渡したい物があるって聞いたけど…なんなの？」
「…これなんだ」
「わ！簪！？ありがとう！漣葉！でも、どうして？」
「何度もお世話になったしさ、俺を救ってくれた人だもん。恩返しついでにこれって事」
「やだ、ついでとか酷いじゃない」
「冗談冗談。楼々姉ならこういう系が似合うだろうって髪飾り屋の爺も言ってたから間違いないと思って」
「ホント有難う！大事にするね！」

楼々は凄く嬉しそうに早速髪にその簪を挿す。
しゃらんと、音を立てた簪に付いている飾り。
本当に似合うな…と改めて思った漣葉。

楼々は一つ深呼吸して、漣葉にあることを訪ねた。

「漣葉は…どこから来たとか、分かる？」
「よく、わからねぇんだ。俺、みんなと一緒に来たし場所自体も良く把握出来なかった。此処が有名な長安だって事は直ぐに分かったさ。こんなに賑やかだし」
「そうね。長安（ここ）は何時も賑やかよ。皇帝防御（こうていぼうぎょ）が来たときは別なのだけれど」
「皇帝防御？何だ其れ？」
「皇帝防御って言うのは…簡単に言うと皇帝がお亡くなりになるって事よ。その防御の時期は白や黒の服しか着てはならないの」

「そうなんだ……やっぱ長安は厳しいんだな。華やかで賑やかだけど」
「えぇ。…そんな感じよ。漣葉も今の間に此処の生活習慣身につけておきなよ？」
「そんな必要なんて何処にもねぇよ？」
「え？何で？」

楼々がはぁ？と言うような顔をしている一方、漣葉はくすくすと肩を揺らしている。

「楼々姉や、柳耀兄の傍にいれば俺はどうせ身に付いていくだろ」
「そう言えばそうね。早く長安になれて、漣葉も何かしなさいよ」
「何かって？」
「仕事とかよ。漣葉も何時か何か仕事、しなくちゃならないから」
「…嫌だ」
「え？どうして？」
「俺、楼々姉や柳耀兄から離れたくない！何なら侍女みたいな事する！楼々姉や柳耀兄が死ぬまでこの邸にいる！」
「漣葉……」
「…この場所から離れたら、姉さんを失ってしまう気がするんだ」

漣葉の姉、愁蘭（しゅうらん）は両親を失った後の漣葉を引き取り、世話をした。本当は血も繋がっていないのに愁蘭は漣葉を弟のように育ててくれた。

漣葉は、愁蘭を姉として慕った。
決して他人とは思ってなかった。

「姉さんは…今でも心の中で生きてる。…俺、もしこの邸を離れるとしたら真っ先に賊を倒す」

「え、どうして？」
「姉さんは……賊に、殺されたんだっ！！！敵討ちをしたいんだ！！！」
漣葉はそう叫んで涙を流した。
楼々はその背中をさすりながら言った。
「漣葉。愁蘭さんは、きっと漣葉を見ているわ」
――空の上で、弟が成長していくのを。
「漣葉がそんなに荒くなれば、愁蘭さんが悲しむんじゃないかしら」
「だけど……っ」
「愁蘭さんの望んだことは、漣葉。貴方の成長を暖かく見守っていく……そうじゃないかしら？」
漣葉ははっとしたように顔を上げる。
漣葉は、愁蘭がいる時に今楼々が言ったことと全く同じ事を言われたことがあった。
『ねぇ漣葉』
『どうしたの、姉さん』
『…私の今望んでいる事って、分かるかしら？』
『姉さんの望んでいること…？うーん…分からないなぁ…何なんだ？』
『漣葉。貴方の成長を暖かく見守っていく事よ。例え、私が何処かに消えてもずっと漣葉の成長、見ているからね。私を信じて』
「姉さんに、同じ事言われたよ。今楼々姉が言ったことと全く同じ

事」
「そうなの？」
「楼々姉。…本当に、姉さんと似てる。毎日一回は間違う」
「愁蘭さんが貴方の心の中で存在を大きくしているんだわ。…喜んでいると思うわ、愁蘭さん」
「そうかな」

愁蘭が亡くなって三年。
まだ十五にも満たぬ漣葉の心の中で愁蘭は生きている。
漣葉は、胸に拳を当て全てを振り切るように空を見上げる。

「楼々姉！今日、姉さんに披露した料理、食べさせてあげるよ！」

楼々を見て漣葉はそう言った。

そして、今日の夜そのご飯を食べて楼々と柳耀が美味しすぎ！と叫んでいたと言う話があったとか。

ホシゾラニ　タクシタ　オモイ（楼々×柳耀）

『今大切な人がいなくなっていたとして。

夜空に散りばめられた星々に

何を願いますか？』

「……っ」

部屋の中で有る物語を読んでいた楼々。
俺も一緒に本を読んでいたのだけれど、後ろで泣くような声が聞こえ吃驚する。

「楼々！？」
「え？あ、大丈夫だよ。目に塵（ごみ）が入ったんだ」
「…嘘付け」
「そ、そんな事無いよ」

俺は気になって楼々が読んでいた本を取り、見る。
楼々の止める声が聞こえたがそんなの聞かなかった。

『今大切な人がいなくなっていたとして。

夜空に散りばめられた星々に

何を願いますか？』

まさか。

これで誰かと重ねて読んでいた…？

「楼々」

「な、何？」

「楼々、これ大切だと思う人と重ねたでしょ」

「え！？ちょ、何で分かったの！？」

「…楼々だから分かった」

「ばーか」

「誰？」

「へっ！？」

「とぼけないで。大切な人って誰なんだ」

「教えられないっ！！！」

其れが俺であること願ってしまった俺は馬鹿だったのだろうか。

「……やっぱり言う」

「え？良いの？言いたくないって言ったのに」

「良いの。……それは…目の前にいる男の子」

「俺って言えばいいのに」

「素直に言えるかばーか！」
「今日馬鹿って言ったの二回目だろ」
「良いじゃない！」
でも、やっぱり嬉しかった。

消えて欲しくなかった。

「もう、柳耀がこの世から消えたら…私、どうしたらっ…」
あーもーまた泣いちゃったよ。
俺どうすればいいか分かんないよ。
泣き顔なんかに凄く弱いんだけど、俺。
あー本当にどうすれば良いんだよ俺。
「柳耀が死んだら…私だって死に行く」
「馬鹿言うな！！」
思わず怒鳴ってしまう。
楼々の肩が震えているのが分かった。
少し口調を抑えてまた口を開く。
「俺だって辛いよ…。楼々が、この世から消えたら。耐えられなくなるよ。泣いて、泣きまくって。死にたいぐらいだよ。…だけど、だけど」

『その分、幸せに生きて欲しいんだ』

「りゅう…よう…」

「どちらかが死んでも、その分頑張って生きていかないと駄目だろ。…俺だって、楼々がいなくなった世界なんて考えられないよ。けど、今を生きていくのが俺達なんだ」

「そうだよね……柳耀は良いよ。そんな事を言える勇気があって。私は…助言すら出来ない。何の助けにもならない」

「そんな事無い。楼々は、俺の人生を変えてくれたんだよ？」

「え…？」

「父上と母上を処刑されて俺は一人になった。何気なく楼々の家に来たら楼々が凄く心配してくれたのを覚えてるよ。…其れで、俺の人生が変わったんだ」

「どんな風にか言える？」

「『闇から光へ放たれた』……って感じ？それに俺は同時に一つの使命が出来た」

『楼々をこの手で守るという使命』

楼々は顔を真っ赤にして視線を逸らす。

背後から楼々の体に腕を回し引き寄せる。

「ばっ馬鹿ッ！何私を抱きしめてんのよ！」

「俺、楼々がいないと落ち着けないよ？」

「……へっ！！！？」

「…居なくなった時を想像して何度も辛くなった。そして何度も確かめた。…楼々は生きてるよね、って」

「確かめなくても私は此処にいる。…何時だっているから」

「居ることを確かめて何時も安心する俺がいたよ。…星空に託すと

したら『どうかこのまま楼々を消さないで』って託すかな」

消えないで
きえないで
キエナイデ

その言葉が頭を過ぎる（よぎる）。

「ねぇ…柳耀」
「ん？何？」
「…このまま、ずっと傍にいてくれる？」
「……いるよ。夢の中でも何処までも、ずっと…」
「信じて良い？」
「勿論」

そう言って抱きしめる力を強くする。

今　この腕を離してしまったら
今　想いを閉ざしてしまったら

楼々が消えてしまう気がした。

俺の傍から
この世から
皆の視界から
言葉の中から

どんなことからも楼々が消えてしまう。

そんな気がしてならなかった。

信じたくないよ。
嘘話でも楼々が消えた、なんて事。
実話でも――。

星空に託す想い
唯一つ

楼々を
俺の傍から
この世から
消さないで
この想いを

星空が　聞いているか何て知らない。
だけど　俺の思いが沢山詰め込んでいる状態で
ホシゾラ　ニ　タクシマシタ

ホシゾラニ　タクシタ　オモイ（楼々×柳耀）（後書き）

あとがき

マジ楼々と柳耀ばっかりで御免なさい＞＜
この二人書きやすいんだもん！
他の２ペア（草魏×不知火＆水伊×要）より断然簡単だもんっ！
しかも甘い系ばっかりで御免なさいっ、はぅ～～～（何
封弥さんは甘い系が大得意なのでこうなっちゃうんですよ！！マジで許して下さ…イタタタッ！（↑
ではでは～＞＜（つーか次も楼々と柳耀じゃん（ぁ

振り向いた刹那　（楼々×柳耀）（前書き）

わーん><

この二人ばっかりでマジで御免なさい！！（土下座）

振り向いた刹那　（楼々×柳耀）

「…ろう……楼々？」
「え？な、何？娘子」
「最近元気ないぞ？どうかしたのか？」
「う、ううん。…なんでもない」

言えやしない。
柳耀が父上の代わりに任務に行っている、だ何てこと。
父上は、戦場を駆け巡る…そんな感じ。
父上が病気故に柳耀が代わりに任務に行くと言っていた。

「私で良ければ聞くぞ。誰も居ないし」
「……内密にしてくれる？」
「分かった」

『楼々』
『何？柳耀』
『俺、お方様の代わりに任務に行くことになったんだ』
『嘘！？りゅ…柳耀が…父上の代わりに任務へ？』
『そ。俺あんまり剣術とかには長けてないけれど、出来る限りの力で行ってくるよ』
『何で！今回の場所、凄く大変って父上言ってた。それで…柳耀が死んだらっ』
『大丈夫だよ』
『え？』

柳耀は私の頭に手を乗せ微笑む。

『必ず楼々の所に帰ってくるよ。…どんなに酷い姿でも。帰るべき場所は楼々の元…だから』
『…分かった。信じてるよ、柳耀』
『絶対に帰ってくる。…そう誓うから。楼々を悲しい目に遭わせるなんて、俺として失格だから』

そんな台詞を残して柳耀は邸を後にした。

そして、今日で任務遂行日から二ヶ月となる。
任務は一ヶ月で終わると言っていたのに、もうかれこれ一ヶ月も過ぎてしまっている。

「……帰ってこないんじゃないかって思うと凄く悲しくて…。泣きたくなる」
「大丈夫だ。柳耀があれほど固い誓いを胸に戦場を駆け巡っているのならもうじき帰ってくるはず。信じて待っていれば必ず帰ってくるよ」
「…分かった。もう少し待ってみるよ。有難う、娘子！元気出たよ！」

立ち上がって邸を後にするけれど…。
いざ思うと、また泣きたくなってしまう。
任務遂行場所から長安（ここ）までで一ヶ月もかからない。
二日有れば帰ってこれるはずなのに…。

「柳耀……っ」

邸の前まで来て思い出して、また涙を流す。
何時も私を待ってくれていて「おかえり」って言ってくれる。

その声が頭で蘇る度に悲しくなる。
やっぱり、帰らぬ人になってしまったのかな…。
「柳耀ーーー！！！！」
「……そんな大声で叫ばなくても、俺なら此処にいるよ」
「え……？」
ゆっくりと後ろを振り返る。
紛れもなく、柳耀だった。
彼方此方に傷跡があった。
額から血まで流れてる。
「りゅう……よう」
暫くの静寂の後、私は声を振り絞った。
「っ…お帰りなさい！！」
そう言って私は涙ながらも柳耀の腕の中に飛び込む。
傷でボロボロの柳耀の腕が私を包み込む。
そして私はちゃんと柳耀は此処にいると確かめる。
そう思えるだけで本当に嬉しかった。
「泣き虫」
「…五月蝿い。どれだけの間泣いて過ごしたと思ってるのよ！」
「御免。彼方此方に傷負わされて帰るのに苦労したんだ。…一刻も

早く楼々の元に帰りたかったから」
「そんなに急いでくれたの…」
「当たり前。それに言っただろ？帰るべき場所は楼々の元、って」
「…ありがとう…本当に有難う！」
「良いよ。こうして帰って来れたんだから。…俺も帰れないと思ったんだ。やっぱりお方様の言うとおり結構きつかった。俺の体力じゃやられるんじゃないかって。…だけど、楼々のこと思い出して必死になった。待ってくれている人がいる。だから、頑張らないといけないって」

『何もかも、楼々のお陰なんだよ？』

柳耀は私を抱く力を強める。
離せないほどに、強く。

「このままこの腕解いたら、楼々を手放す気がするよ」
「ばーか。私は何処にも行きませーんっ！」
「そう言うと想ったから良いけど。じゃ……改めて」

「ただいま、楼々」

振り向いて良かったとその台詞を聞いて思った。

振り向かなかったら、柳耀を見れなかった。
無事に此処まで帰ってきてくれた柳耀を――。

振り向いた刹那

私に喜びをくれました

「おかえり――…柳耀」

刻印

「……」

右の服の袖を捲り、自分の右手首にある刻印を見た。
五歳の頃、突然出来た刻印。

『刻印解放』

と言った瞬間に、その刻印は光り出して力を解放する。
私の剣が火に包まれてしまう。
…その分威力を増すのだけれど。

使い終われば体に凄い負担が掛かってその場に倒れ込んだりもする。

この刻印……一体何なんだろう。

何のための、刻印なんだろう。

「……草魏」
「ほえ！？いっ何時からいたのさ！」
「つい数秒前。…また、その刻印を見てたのか」
「うん…本当に意味が分からないよ、この刻印」

邸にあった本によると、この刻印は千人に一人ぐらいしか出来ない刻印だという。

その力は合計五回まで使える。
だが、五回使い切ってしまうと死に至る場合もある。

死に至るのはその使い切るだけじゃない。
力の操作が必要なため、其れが出来なくなれば高い確率で死に至る。
その力は、威力は強いものの負担もきつい。
長所より、短所の方が多いという嫌な刻印。
確かに賊を追い払うことなどには凄く役立つ。
……だけど。
使い切ってしまえば、私はもしかしたら死ぬのかもしれない。
そう思うと少し怖かった。
この力ばかりに頼るわけにはいかない…。
頼ればその分体まで弱っていく。

「その力。今、何回使った？」
「一回だけ。本気で危なくなったとき有ったでしょ、私と不知火も負傷して為す術がないときに一回だけ使った」
「やっぱり、負担は重かったんだな」
「あぁ。…結構きつかった。体が想うように動かなくなったから」

一度、賊と鉢合わせになって対決をしたのだが向こうがあまりに強くて私も不知火も負けそうになっていた。
其処で一度だけ、刻印の力を解放した。
だけどその後戻ろうとしても体が怠さに襲われ想うように動かなかった。
酷い風邪を引いたかのように怠かった。
その時は不知火に何とか支えてもらって帰ることは出来た。
…次。

次、この力を解放したらこれ以上に酷くなるのかもしれない。
倒れてしまうのかもしれない。

そう思うと、怖くてならなかった。

「炎」と刻まれている私の右手首。
……なんで、この文字なんだろう。

「あーもう！この刻印って謎だらけじゃないか！」
「おっ、落ち着け草魏！今すぐ解明しろって事じゃないんだし」
「…だよ、ね」

本当に……五歳の頃の私は何のことかさっぱり分かっていなかった。

五歳から六歳に変わる前日の日の夜。

突如私の右腕が光り出して、刻印が出てきた。

『何だろ…これ。…えっと、ほのお？ほのおって書いてる。…何だろう、本当に』

幼い私でも炎という字は読めただけ良かった。
翌日、私は偶々会った知火にこの事を話した。

『ねぇ、不知火。これ、見て』
『なんだそれ。…ほのお？ほのおって書いてるのか？』
『多分そうだと想う。昨日の夜、突然出てきたんだ』
『こくいん、ってやつじゃないか？それ』

『こくいん？何なの、其れ』
『俺もよく知らないんだ。だけど、父上から一度こくいん、って言葉聞いたこと有る。…大きくなったら調べてみろよ』
『そうだね！ねぇ、これ私達だけの秘密にしない？』
『え？俺達二人だけの……？…わかった。そうしよう！』

そう言って、別れたっけ。

……あれから七年。
十二になった私は、邸の倉庫からそれに関する本を探し出し読んでいた。

『刻印：「炎」「泡」「森」「光」＝千人に一人か二人なるかならないかという凄く珍しい刻印。
その刻印が右手首に出れば、力を解放できる。
だが、その力を使うことが出来るのは五回のみ。
使い切れば低い確率で死に至る。大抵は何もなく生きていける。

だが、使い切る以外にもう一つ死に至ってしまう事がある。
それは力の操作。力の調整。
この力は解放するときに非常に重い負担が掛かり、調整するのも大変。
其れで操作・調整が出来なくなれば高い確率で死に至ってしまう。

因みにこの刻印は何をどうやっても消す事は不可能である。

「炎」

炎が右手首に出れば「刻印解放」と唱えると己が持っている剣に炎が灯り、威力も上がる。

だが、同時に負担として酷い怠さに襲われたり、倒れたりする。
最悪の場合は、死に至ってしまう。
これが一番危険な刻印。出れば操作・調整などを上手くする必要がある。
更に、この刻印を時間を空けずに連続発動すると刻印自体が暴走し直ぐに死に至る。
全体的に危険な刻印である。

「泡」

泡が右手首に出れば上と同じように唱える。
己の剣に空色の光が灯り威力が上がる。
負担としては、頭痛や眩暈・また咳き込み・怠さに襲われる。
死に至る事は低い。
一番安全と言えば安全。体が弱いものに出てしまえば、死に至る確率も上がる。

「森」

森が右手首に出れば今まで記したように唱える。
己の剣に緑の光が宿り威力が上がる。
負担としては、腹痛や体の一部の一時麻痺・頭の混乱・苛つきなどが良くある。
炎の次に危険な刻印。
死に至る確率は、それほどではない。
操作できれば問題はないだろう。

「光」

光が右手首に出れば今まで通りに唱える。

己の剣に金色の光が宿り威力が上がる。
負担は、頭を締め付けるような頭痛・腕痛等が良くある例。
対して危険ではないが、操作が非常に大変。
光を使えば剣が少し重くなり、操作が大変になる。
死に至る確率は低いと言えば低い。
だが、場合に寄れば炎の次、森と同じぐらいになる。』

そんな説明が書いてあって、ショックを受けた記憶がある。
私の右手首は一番危険な刻印「炎」が刻まれている。

刻印自体が暴走すれば、直ぐに死んでしまう。

……途轍もなく危険な刻印だ。
相当…ヤバイ。
私はこのままこの刻印を使っていくと、死ぬのかもしれない。
いや、死ぬと想う。

この刻印は便利なものである事は確か。

…だけど、凄く危険なんだ。

「……なぁ草魏」
「ん？」
「実は……さ、俺の右手首。昨日だっけ、何か出来たんだよ」
「刻印！？」
「恐らくな。……ほら」

不知火の右腕には「泡」と刻まれていた。
一番安全な…刻印。

一番危険と一番安全。
正反対だ。

「良いよね……一番安全で」
「え？」
「……『「泡」
泡が右手首に出れば上と同じように唱える。
己の剣に空色の光が灯り威力が上がる。
負担としては、頭痛や眩暈・また咳き込み・怠さに襲われる。
死に至る事は低い。
一番安全と言えば安全。体が弱いものに出てしまえば、死に至る確率も上がる。』
って、書いてあった」
「じゃ、じゃあお前は？」
「『「炎」
炎が右手首に出れば「刻印解放」と唱えると己が持っている剣に炎が灯り、威力も上がる。
だが、同時に負担として酷い怠さに襲われたり、倒れたりする。
最悪の場合は、死に至ってしまう。
これが一番危険な刻印。出れば操作・調整などを上手くする必要がある。
更に、この刻印を時間を空けずに連続発動すると刻印自体が暴走し直ぐに死に至る。
全体的に危険な刻印である。』って」
「……やばいんだな、草魏」
「うん。私、まともに調整なんて出来やしない。…どうしたら、良いんだろうね」

縁側に座って暫く言葉を失う私達。

どうすればいいか、分からなかった。
この刻印は消せないって書いてあった。
…このまま、力を使い果たしてしまったら死んじゃうのかな。

嫌だよ…仲間と離れるなんて！！！
無理だ。使うなんて……
だけど、既に一回使っただけで操作自体も難しくなってきてる。

「この力を抑えられたらいいのに……」

ふと呟いた言葉。
其れが叶えばどれだけ良いか。

「抑えられたら、お前は死ななくて済むんだ。…どうしたら良いんだよっ！！！」
「――不知火。其れは私にだって分からない。誰にも分からないんだ」

本には抑える方法なんて一切書いていなかった。
ただ、この刻印は消せない――ただ、それだけ。

一生消えない刻印。

もし、賊の所為で何度か使ってしまったら……。

「どうしたら、良いんだろう」
「俺にだって…わかんねぇ、そんなの」
「…取り敢えず、この力を使いすぎない事が第一。…そうだと、思うよ。私は」
「俺も、同感。使わなかったらどうにかなるんだろ？なら、使わなかったら良いんだ」
「何とか、普通の状態で賊を倒せるようにしないと。……よし！不知火！手合わせ、頼める？」
「合点承知！」

その後、ずっと木刀が鳴り合っていたのは、分かり切った事。
右手首の刻印を忘れるかのように、ずっとずっと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9844d/

創作キャラ短編集

2010年11月12日20時19分発行